



Palazzo もおかげさまで第 2 号目を出せるようになりました。

本号からは出版元が一般社団法人セルフエナジーハウス研究会になりました。

3.11 以後に大きく変わった、エネルギーに対する国民の意識。ゲリラ豪雨や直撃する台風、地震や津波だけではなく、私達は常に災害に向き合っている事を思い知らされています。

そして、あまりにも大きい原発事故の後遺症。自分や家族の身は自分達で守る！

食と同じように、生活の基本であるエネルギーも自給自足する。これは、これからの私達のライフスタイルの基本かもしれません。

私達は自然の中に大きなエネルギー源がある事を忘れていたのです。実は、私達はエネルギーに囲まれて生活しているのです。そのエネルギーを自分達の身の丈に合わせて取り入れ生活していく。

もしかしたら、それが最も人間らしい生き方なのかもしれません。自分で使うエネルギーは、自分達で身の回りから作り出し、そして大切に使う。

本誌は、こんな考え方を基本に、様々な情報をお伝えしたいと思っています。

《『palazzo』編集長 有馬幸一》

# Contents



勉強会と言う  
家づくりの方法!!

3

注目される次世代太陽光モジュール  
「CIS」

15

Fabeic

9

自然エネルギー  
熱を蓄える薪ストーブ

19

世界の省エネ住宅シリーズ Vol.2 「ドイツ」  
「Federal Republic  
fo Germany」

11

Book  
「核なき明日のために」

21

# 勉強会と言う 家づくりの方法!!

Writings : Koichi Arima



①ベルギーの古典的な石造りの家。  
②ロンドンはテムズ川沿いのタウンハウス。  
③イギリスの少女リビィーと両親。  
④きれいな紫のグラデーションを使ったリビィーお気に入りの部屋。

## 洋の東西を問わず、 家作りは人生の大きな仕事の一つである。

ベルギーにはこんな話がある。  
ベルギー人は石を抱いて生まれ、成長に合わせて1つ1つ石を集めてやがてその石で家を作る。  
ベルギー人の堅実さを象徴するような逸話だが、石造りの家がほとんどのベルギーらしい話だ。  
実際に石を拾い集める訳では無いが、子供の頃から家についての様々な知識を蓄えていき、やがて家を建てると

きには、その知識を生かして自分に合った良い家を作るというのが彼らの一般的な考えだ。  
週末に郊外の展示場を多くの人々が巡り歩き、住宅関連の雑誌が数多く出版されていることから伺われる。  
イギリスでは、9歳の女の子が自分の部屋を気に入ったようにコーディネートしている。  
まさに、生まれたときから将来の家作りを学んでいる。  
欧米の女性は、主婦になったとき洋服のセンスよりインテリアのセンスの良し悪しが評価されるので、女子の家庭教育では家について学ぶことがとっても重要なのだ。  
家作りは言わば人生そのものを作ることに他ならない。

## それに比べたら、日本はどうだろうか？

どこの親も子供部屋を作るが、ほとんど子供の希望は聞かないだろう。親自体も、将来の家作りの為に貯金を始めて、イベントや記念品目当てに住宅展示場を覗いてみるが、建てる段になったら勉強すれば良いと説明を受け流すだけ。いよいよ具体的に計画をスタートさせると、雑誌を買い漁り一生懸命ネットで調べて知識だけはとりあえず持つが、氾濫する情報で結局は良くわからず夢だけが広がっていく。いざ建てる段になっても、住宅会社の営業マンの説明では実際のところ良く解らず、予算の都合で夢は萎むばかりで、最後は営業マンの感じが良からと契約する。営業マンは売る事が仕事なので感じが良いは当然で建築中は、ほとんどがお任せ状態で、集金以外は姿を見せない。こんな建て方だからトラブルも少なくない。クレームを付けてものりくらりとかかわされ、結局は泣き寝入りする事になる。建て主の理解不足と住宅会社の説明不足が原因なのに、当の住宅会社の人間までもが住宅産業はクレーム産業など言い出す始末。これが日本の現状である。

## 棟梁は住まいづくりのスペシャリスト！

残念だが日本には欧米のように子供の頃から自然に家作りを学ぶという風習が無いが、どこの町や村にも信頼の置ける家作りの先生として棟梁が存在していた。彼らは住まいの専門家であると同時に、人々から尊敬される町の名士でもあった。  
町に暮らす人々の個々の家族構成や好みは日ごろの付き合いからよく知っていたので、家を建てたいと相談に行けば、細かな部分までの確かな提案してくれる。材料や技術に関しても豊富な知識を持っているので、材木と一緒に買いに行き、一本一本細かくチェックし、腕の良い職人を手配して陣頭指揮を取る。  
時としてそれが施主の希望であっても、プロとしてふさわしい物しか取り入れない頑固さも持っていた。  
こうして、建て主と一緒に、施主の家族やライフスタイルに合わせた質の良い家を作る。  
それゆえ町の名士として信頼を集めていたのだ。  
残念ながら、戦後、日本から棟梁は消えていった。



**棟梁に代わって家作りを担ったのは、家を商品とする住宅会社であった。**

戦後、多くの住宅を素早く建てる必要から住宅を工場で作る会社が生まれた。彼らは短い期間で完成する住宅を開発し、商品となった家を売り歩いた、それはまるで車を売るようであった。様々な装備を施した家は年毎に魅力的な商品となり、会社が大きくなる事で日本の経済は発展し、私達の暮らしは便利で快適になった。しかし、20年も経てば建替える事を前提として建てられた家は、少し古くなると価値がなくなり、もはや資産ではなく自動車と同じような耐久消費財となった。これらの家が建ち並ぶ統一感の無い町並み、いずれ建て替えるからと手入れされない家々、・・・小さな土地にぎりぎりに建てられた家には、最新の家電や家具等の物はあふれているが、なぜか生活に豊かさを感じない。われわれは先進国の中でもっとも陳腐な住宅に住むことになってしまった。

家作りには多くの知識が必要である。土地をどう選ぶのか、そしてどんな家を建てるのか、間取りやデザインも重要だが、ローンの金利は銀行か生保かどちらが有利か保険はどんな掛け方が良いのか、補償はどうなっているのか、そして毎月のランニングコストは・・・家族が健康で快適に暮らすためには、もっと大事な事は無いのか？本を読んでも、ネットで調べても、あまり確信にふれた情報は少ない。どれも良いことばかりしか書いていない。あまりにも情報が多すぎて、どれが本当か、適切かがわからない。本当に自分に合った家作りを学ぶことは難しい。だから、欧米では自分のライフスタイルに合わせた家作りを、時間をかけて学んで行くのである。



**では、これから家作りを考えている人はどうしたら良いのだろうか？**

“家作り勉強会”という家の建て方がある。この勉強会は、セミナーのような大人数を相手に一方的に話すのではなく、1組の家族単位で行われる。必ず夫婦で参加することが条件で、4日間で約10時間かけて、家作りに必要なあらゆる知識・ノウハウを徹底的に勉強して行くのだ。もちろん、建築知識のない素人向けに、わかりやすく教えてくれる。なんと、この勉強はすべて無料である。この勉強会の主宰者、「上野氏」は30年も住宅会社を経営してきた言わば家作りのベテラン。しかし、今までの家を売るという仕事の方法に、常に何かが違うと感じていたことから、もっと違う家作りの方法があるのではと考え、家作りの考え方や業界の裏表を徹底的に勉強してもらい、その上で自分達の求める家を作り出してもらおうと勉強会を企画した。

勉強会で学んだことを基に、展示場を見たり住宅会社や不動産会社と話を進めれば、彼らに不都合な、でも最も大事な所をごまかされないで、失敗しない家作りができる。それが、建て主にとって一番良い家作りの方法だと上野氏は語る。それでも不安な場合は上野氏に、かつての棟梁の役をお願いしてもらってもいい。もちろんその場合は無料とはいかないが、すべての費用がガラス張りで見えるので、納得のいく家作りができる。住宅会社のように営業がせっせと販売し、現場監督は掛け持ちで仕事をするのではなく、建て主と一緒に、家作りをしていく。まさに、棟梁なのである。この方法で家を作った人達は誰も満足そうで、完成後も上野氏との付き合いがづいていくという。こうして家を作った人達の子供は、おのずから家作りを学んでいくであろう。なにより、親自身が家作りのノウハウを知っているのだから。